

佐々木望作 「破壊時代」

< 前編 >

今井広行 じゃあさあ、おれたちのよく使うものから、無駄になるもの、環境破壊につながり
 そうなものを挙げてみよう。

伊原友美 そうねえ、スーパーの袋なんかそうじゃない？

立川美佳 あれは燃やすとガスが出るし、埋めてもいつまでもそのままのものね。

富永道夫 新聞で使い捨てカメラもずいぶん問題になってたなあ。

広行 うん、あれは紙とプラスチックの両方でできているから、ゴミ処理が大変だそう
 だよ。

友美 それに、フラッシュ付きだと電池がまた問題なんだって。

美佳 大体使い捨てをそんなに利用する必要はないわよね。どうしてもってときなら分
 かるけど。

(効果音) (なおもガヤ続く)

広行ナレーション 僕は今井広行。青春高校2年生。今度、社会科のグループ発表をすることになり、
 僕らのグループは環境破壊問題を取り上げた。ちっとテーマが大きすぎる
 けど、始めてみると結構みんな真剣になってきたみたいなんだ。そうそう、グル
 ープのメンバーは今話してる富永道夫と、伊原友美、そして立川美佳と僕の4
 人だ。

道夫 フロンガスによるオゾン層の問題も深刻だなあ。

友美 なあに、それ？

広行 フロンガスって、あのスプレーとかに入ってるガスだろう？

美佳 で、オゾン層ってのは？

道夫 オゾンっていうのは、酸素の原子が2つくっ付いたもので、原子記号で言えば
 Oで…。

友美 化学の授業じゃないんだから、ややこしいことは抜かして。

道夫 要するに、そのオゾン層が地球をすっぽり包んでいて、それが太陽光線から地
 球を守ってくれているんだ。

広行 でも太陽ってのは、なくてはならないものだろう。それがどうして危険なの？

道夫 太陽光線は、もともと生物には危険なものらしいんだ。特に紫外線なんか
 ね。

美佳 ああ、そう言えば最近、化粧品なんかでも、紫外線カットっていうのが目玉にな
 ってるわ。

広行 ソバカスだけならいいけど、紫外線は皮膚がんの原因にもなるんだよ。

友美 怖いわねえ。海に行って日焼けなんかする気なくなっちゃうわ。

美佳 あ、それじゃあ、スプレーにフロン使うのやめればいいのね？
道夫 またそう簡単に言う。そんな単純じゃないんだ。
美佳 単純で悪かったわね。
道夫 あ、ごめんごめん。そういう家庭用は、実はすでにほとんどフロンは使用されて
いないそうだよ。
友美 なら安心じゃない。
道夫 いや、もともとフロンは工業用の使用量が圧倒的に多いんだ。電子部品を洗う
ためにね。
広行 とすると、フロンを使わなくなると、電気製品は軒並み値上げになるかも。
道夫 うん。一応国際的にフロンを全廃することに決めてはいるんだけど、日本は
その中でも消極的らしいよ。
友美 すると、便利さを手にするために大切な自然の働きを壊しているわけね。
美佳 かかっている、一度手に入れた便利さはなかなか手放せないから、問題は深刻
よね。
道夫 それから、熱帯雨林の乱開発も大きな問題だな。
友美 ネットイウリン？
美佳 あ、それって、アマゾンとかのジャングルでしょう。
道夫 お、すごいじゃん。
美佳 またバカにしてる。
道夫 ものすごいジャングルをブルドーザーが入って行って、どんどん切り倒して持っ
ていく。その行き先が日本というわけ。
友美 でも、それだけのジャングルだったら、少しぐらい切っても大丈夫なんじゃない？
道夫 それが大丈夫じゃないほどのスピードで切っているんだって。
美佳 切り倒したあとは、回復するどころか、切り倒した所の周りがだんだん枯れちゃ
うんでしょう？
道夫 うん。しかも熱帯雨林は、地球の酸素の何分の一かを生み出しているんだ。だ
から、熱帯雨林に大きな変化が起こると、地球の酸素が薄くなってしまうという
ことにもなりかねないそうだよ。
友美 自分で自分の首を締めているのね。それにも気づかずに、目先の利益を求め
て先頭を走っているのが日本人なんて、情けないわね。
美佳 広行君。どうしたの、急に考え込んで？
広行 いや別に。
道夫 そうか。お前のおやじさん、商社勤めだったな。別のお前のおやじさんを悪いと
言ってるんじゃないぜ。
広行 ああ、分かっているよ。

道夫 よし。じゃあ準備はこれくらいでいいかな。発表は広行の担当だから、後はよろしく頼んだよ。

広行 うん、大丈夫。

道夫 じゃあ明日。

美佳、友美 さようなら。頑張ってるね。

ナレーション こうして、翌日のクラスでの発表会になった。

広行 ...というわけで、今の日本では何もかも便利になりましたが、その便利さの裏には、地球の環境を破壊してしまう恐れがあるのです。便利で安いものを作るために、大切な地球の働きを狂わせてしまったり、使い捨ての物が増えることによって、いつまでもゴミのままであり続ける、タチの悪いゴミがあふれてしまったりしています。便利さの追求も、決してそれ自体悪いものではありませんが、わたしたちはそれよりも大切な地球の環境を守らなければなりません。以上で発表を終わります。

先生 よし、なかなか力が入った発表だったな。いろいろといいポイントを突いていたと先生は思う。

じゃあ質問のある人はいるか？

田中浩 はい、先生。

先生 よし。

道夫 (ひそひそ声で)おい、また田中だぞ。

広行 ああ。あいつ、何にでもケチつけやがる。しかも結構理屈通っているからなあ。

浩 今井君の発表では、環境を破壊するようなことをしてしまうものはいけないということのようですが、そうすると僕たちは、何にも買えないし、使えないことになるんじゃないですか？

広行 それは程度の問題でしょう。

田中 いや。だって例えば自動車だって、空気を汚しながら走っているわけだし、今井君は自動車には乗らないつもりですか？

広行 それは極端だよ。

浩 いや、今井君の生活だって、君が言う環境を破壊する社会の上に成り立っているんだから、今の便利な生活を全くやめない限りは、何にもしないのと同じだよ。

広行 それじゃあ、僕たちの発表は全く意味がないと言うのかい？

浩 まあそうかもね。今井君のお父さんも、確か商社の輸入部で働いているんだろう？ そうすると君は環境を破壊してもうけたお金で、今までずっと育ってきたというわけさ。そうだろう？

先生 田中、そこまで言うのは言いすぎだし、本論から外れるぞ。

(効果音) (終業のチャイム)

先生 時間だから、今日はここまでにする。次の発表のグループは準備を頑張れ。

ナレーション 僕は、学校が終わり、うちに帰ってもずっと考え続けていた。

浩 (エコー)君は環境を破壊して、もうけたお金で育ってきたんだろう？

ナレーション 田中の言葉に、「それは違う」とは言えなかった。現実には田中の言うとおりがもしれない。「父の仕事がもっと世の中の役に立つ仕事だったら、どんなにいいだろう」と、いつしか僕は思い始めていた。

(効果音) (テレビ音声。スイッチを切る。)

広行 (あくび)あーあ、さあ、もう寝ようかな。

母恵子 いつもテレビばかり見てないで、たまには勉強もしたら？

広行 それは見えないところでちゃんとやってるの。ところでお母さん。

母 なあに？

広行 お父さん、最近帰りが遅いね。

母 ええ、そうねえ。

広行 仕事、忙しいのかなあ。

母 うん。

広行 それに最近、ずいぶんお酒飲んで酔っ払って帰ってくるみたいだけど。

母 そうね。心配ね。

(効果音) (ドアの開閉音)

父 (かなり酔って)今帰ったぞ。水くれ。

母 ははい。でもあなた、最近毎晩飲みすぎですよ。特に今日はひどく寄ってらっしゃるわ。

父 いいから水を持ってきてくれ！ おい広行、お前、頑張って勉強して、いい仕事をしろよ。

広行 いい大学入って、お父さんのように一流の商社マンになって、毎日飲んだくれろってことかい？

父 なんだと？

母 広行。お父さんに向かってなんてこと言うんですか。謝りなさい。あなたも今は酔ってるんですから、もう怒らないでください。

ナレーション だがダメだった。昼間のことがあったし、父も酔っていたので、二人とも何かを発散するように、相手にぶつけてしまったのだ。

父 お母さんは黙っていなさい。

広行 広行、お父さんの仕事のどこが気に入らないんだ？

父 何もかもさ。お父さんたちは発展途上国の木をどんどん切って、地球の大切な財産を傷つけているんだ。

母 分かった風な口を利くな。途上国だって、その輸出で外貨を稼いでいるんだ。それで飢えずに生きていけるんだぞ。

広行 だから、その国のお偉方も同罪だよ。目先のもうけだけで、先のことは全然考えていないんだ。何十年、何百年後の人たちから、きっとお父さんのような仕事をした人は恨まれるんだ。

父 なんだと？ おれがだれのために働いてきたと思ってるんだ。

広行 ああ、お父さんのお陰さ。だから、そんなお金で育てられてきたことが悔しいんだよ。

父 広行、もう一度言ってみろ！

母 二人とも、もうやめて！

広行 ああ、お父さんたちの仕事は将来の恥になって残るんだ。

父 広行、貴様！

母 あ、お父さん、やめて！

(効果音) (父が広行の胸倉を捕まえて、ピンタを食らわす音)

ナレーション 初めて父に本気に殴られた。大きなショックだった。いや、殴られたからではない。ピンタを食らわそうと、僕の胸倉をつかんだ父の目に、涙が浮かんでいたからだ。

<後編>

ナレーション 僕の名は今井広行。青春高校 2 年生。この間、学校の研究発表で、環境破壊をテーマに発表した。しかしクラスでの質問から、父がその環境破壊の張本人であり、それで稼いだ金で僕は育てられてきたのだと指摘され、ショックを受けた。

その夜も、酒に酔い遅々帰宅した父と、その環境破壊のことで口論となり、僕は父から殴られた。その時、僕は父の目に初めて涙を見たのだ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 父からしかられて1週間たったけど、あれから父とは話していない。父はその後深酒はしなくなり、帰宅も早くなった。でも、何か家の中は暗い雰囲気漂ってしまっている。そんなある夜のことだった。

(効果音) (夜中に広行が水洗トイレを使用後手を洗う音)

広行 (寝ぼけながら) ああ 2 時か。あれ、父さんと母さんはまだ起きてるみたいだな。何をしているんだろう。

ナレーション トイレに起きた僕は、リビングで両親が話しているのに気づき、そっと聞き耳を立てた。

父 ...というわけなんだ。恵子、本当にすまない。これで部長への昇進をあてにしていた新居の購入も、また待たなければならなくなってしまったよ。

母 あなた、いいんですよ、そんなこと。でも、それ本当にあなたらしいじゃないですか。

父　　そう思ってくれるかい？

母　　ええ。実を言うと、あなたがただの猛烈社員になってしまったんじゃないかと心配していたくらいですもの。かえって安心したわ。

広行　途中からで、父がどんな決心をしたのかは分からないけれど、何かとても温かいものが感じられた。

母　　ねえ、あなた。ひとつお願いがあるんだけど。

父　　なんだい？

母　　わたしと一緒に教会に来てくださらない？

父　　教会かあ…。

母　　イヤ？

父　　そうだな、今が行ってみるチャンスかな。いや、これは君にとって、僕をクリスチャンにする絶好のチャンスだな。

（二人の笑い声）

広行　母は、父と結婚してしばらくしてクリスチャンになったそうだ。僕は生まれるとすぐに教会に連れていかれて、教会で育ったようなものだ。僕はまだはっきりとクリスチャンになるとは決めていない。でも教会は好きだ。父も行ってくれたらそれはいいけど、今まで全然期待はしていなかったから、これはちょっとした驚きだ。母は、父と結婚してしばらくしてクリスチャンになったそうだ。僕は生まれるとすぐに教会に連れていかれて、教会で育ったようなものだ。僕はまだはっきりとクリスチャンになるとは決めていない。でも教会は好きだ。父も行ってくれたらそれはいいけど、今まで全然期待はしていなかったから、これはちょっとした驚きだ。

そして次の日曜日、父は母に誘われるまま、本当に教会についてきたのだ。

（効果音）　　（賛美歌。礼拝後のガヤ）

伊藤牧師　　今井さんのご主人ですね。よくいらっしやいました。牧師の伊藤です。

父　　ああ、これは。いつも家内と息子がお世話になっています。

牧師　　初めてで緊張されたでしょう。

父　　ええ、少し。でも想像していたのとは違って、何か安心できるひと時でした。

牧師　　それはよかった。どうです、少しお茶でも飲みながら、壮年会の交わりに出ているか？ わたしも一緒ですから、いかがですか？

母　　あなた、わたしは婦人会がありますから、出てらっしゃいよ。

父　　うーん、じゃそうするか。ではよろしく願います。

牧師　　いやいや、そう硬くならず。 （笑い）

広行　僕は高校生会の連中と一緒に飯でも食ってくるよ。

ナレーション　それから小 1 時間たって教会に戻ると、父と母はそれぞれの集会を終え、うちに帰るところだった。

父 今日はどうもお世話になりました。

牧師 いえいえ、またどうぞいらしてください。

父 ええ。また来週も来たいと思いますので、よろしくお願いします。

牧師 それはうれしい。お待ちしております。

母 ねえ広行。わたしたちは帰るけど、どうする？

広行 もう少し残っていくよ。

父、母 それでは失礼します。

牧師 失礼します。また来週。

広行 先生。父が教会に来て、しかも残って先生と話すなんて驚きですよ。

牧師 (笑) 総会。でもああやって第一線でバリバリ働いていらっしゃるお父さんも、心の中ではいろいろ悩んでいらっしゃるんだねえ。

広行 え？

ナレーション 僕はその時、あの父の涙を思い出していた。

広行 父花にか話してましたか？

牧師 うん。君をひっぱたいてしまったことを後悔なさっていたよ。

広行 本当ですか？

牧師 本当だとも。でも先生は、君のほうがまず謝るべきだと思うな。

広行 僕も悪いことをしたとは思いますが、でもどうしてですか？

牧師 うん。君のお父さんは実に誠実な方だ。君が知らないご自分の気持ちを、私に率直に話して下さったよ。

広行 僕が知らないこと...？ 先生、教えてください。

牧師 いや、それは他人のわたしから言うべきことじゃない。お父さんが。折を見てきつと話して下さるだろう。もちろん先生は広行君の気持ちもよく分かる気がする。尊敬しているお父さんが、環境破壊の当事者だと聞いたら、ショックだろう。でも君の考え方の中には、一つかけていることがあるように思うんだが。

広行 欠けていること、ですか？

牧師 うん...。それはね、君がお父さんの生き方を批判するのは自由だけど、その君自身は、こういう世の中の現実の中で、一体どう生きているか、ということなんだ。

広行 僕ですか？

ナレーション 僕は、一瞬ぎくりとした。そんな難しいこと、あまり考えたことがなかったのだ。

牧師 人間だれでも、“楽をして、得をして生きたい”と思うよね？

広行 ええ、そうです。

牧師 でも、得をしたいと思っている人間が、2、3人ならまだやっていけるだろうけど、これが数が増えたらどうなると思う？

広行 うーん。そのしわ寄せっていうか...そういう人たちに吸い上げられて、そんする

人も増えるんじゃないですか？

牧師 それが今の現実だろうね。グローバルに世界の現状を見てもそうだろう？それで逆に、他人が得をする、というか、幸せになるためなら、自分は損をしてもよいという生きかたが、今こそ大切じゃないか k と先生は考えているんだ。個人にとっても、そして大きく日本の国家としてもね。

広行 それで解決になりますか？

牧師 そう先を急いじゃいけないよ。そう、社会や何か大きなものを動かそうとするときに、自分の生きかたが定まっていなければ、何も動かすことはできない。一步一步だ。

広行 “他人のために自分は損をしてもいい”かぁ…。難しいですね。

牧師 難しいどころか、そんなことはできないよ。

広行 なんだ先生、冗談を言ってるんですか？

牧師 人間にはできないけれど、その生き方を見をもって示してくれた方がいるんだよ。広行君はもう長く教会に来ているから、分かるだろう？

広行 …そうか、イエス様の十字架のことですね？

牧師 わたしのために命まで投げ出してくれた方がいる、と本当に分かったときに、自分もひとのために損をしてもいいという生き方をする力を頂くことができるんだ。

広行 そうか。信仰っていうのは、単に心の安らぎを求めるために持つのかと思ったけど、そうじゃないんですね。

牧師 うん。信仰はその人の生き方全体を左右する、人生の土台なんだよ。

広行 ふーん。僕の教会での気持ちも切り替えたほうがいいなあ。

牧師 今まで、そんなにいい加減だったのかい？

広行 また先生、そんなことを言う。あ、そろそろ帰らないと。先生、じゃあまた来週、さようなら。

牧師 さようなら。

ナレーション 僕は道々、牧師の言葉を考えていた。何か大きな課題を突きつけられたような感じだった。それにしても、僕が先に謝るべきだという父の出来事とは、一体なんだらう？

(効果音) (ドアの開閉音)

広行 ただいま。

母 お帰りなさい。ちょうどいいわ。お父さん、散歩に行っているから。

広行 なあに？

母 広行。お父さんねえ、とっても大変だったのよ。会社の新しいプロジェクトの責任者だったんだけど、お父さん、会社のトップと対立しちゃったそうなの。

広行 どうして？

母 そのプロジェクトというのが、南米のジャングルを切り開いて、材木の輸入をす

るというものだったらいいの。それで会社側の方針は、とにかく効率一本ヤリで、片っ端から切りまくって持ってこいという感じだったらいいわ。お父さんは、何とか自然を壊滅的な打撃から守るために、乱開発せずに長期的に伐材と植林を平行して行うという案を出して、相当に粘ったらしいの。

広行
母

ふーん。
でも、結局会社のトップにおもねる勢力に押し切られて、お父さんはプロジェクトの責任者から降ろされて、しかもそのあとに予定されていた部長昇進もふいになっちゃったのよ。

広行
ナレーション

本当？
この間の夜中の、父と母の会話は、これだったのだ。だとしたら、僕が父に不平不満をぶつけて殴られたあのころは、父が必死になって、非人間的な会社のやりかたと闘っていた時じゃないか…。

広行
母

僕、お父さんにとんでもないこと言っちゃったんだ。どうしよう、お母さん。
大丈夫よ。お父さんだって、そんなにヤワじゃないわよ。「やっぱりあいつはおれの息子だ」なんて、かえって喜んでるわ。

(効果音)

(ドアの開閉音)

父

ただいま。

広行

お父さん！

父

ああ、広行、帰ってたか。いや、教会ってと子は、なかなかいいもんだな。あの牧師さんの話も…。

広行

(さえぎり)お父さん、ごめんなさい。本当にごめんなさい。僕…僕…。

父

いいんだよ、もう。いや、お父さんのほうこそ殴って悪かったな。もう二度とお前を殴ったりはしないよ。それより、これからは、広行から聖書の話でも聞かなきゃな。

広行

え、お父さん、続けて教会へ行くの？

父

ああ。あの牧師先生の言った、他人のために喜んで損をするという生き方は、いささか胸にこたえた。それとは正反対の生き方をしながら、長い間、当三なりに求めてきたものが、確かにあるような気がしてきたんだ。

広行

牧師先生は、僕にも同じ話をしてくれたよ。

父

そうか。この点では、男同士、同じところに立ったわけだ。

広行

うん、そうだね。

母

あら、そのことなら、わたしも全く同感ですわよ、お父さん。

父

そうか。大事なことを忘れて、失礼しました。

(3人、笑う)

ナレーション

僕の中にわだかまっていたものが、音を立てて溶けていった。
今、僕たち親子3人は、同じ土台に立てた。少しでも得をしたい、楽をしたい、

豊かになりたいという、飽くなき人間の欲望が、恐るべきいきおいで地球を蝕んでいる「破壊時代」。その大きな壁の前には、全く無力感に襲われそうになる。でも、目覚めた者は、闘わなきゃ。父も、母も、そして僕は僕なりに。よみがえった 21 世紀を、この目で見るとために。

< 完 >